# 我國禪宗の源流に就いて

二宮守人

# 一

比叡山による傳教の新佛教運動の內容に禪が數へられてゐる事を以て、日本禪法門の源流とする事は榮西の興禪護國論も靜照の興禪記も其他諸記の等しく一致する處であるが、安然の教時諍によれば當時この禪法門は單なる口決によるもので正統佛教と認める事は出來ないと南都の僧統から斥はれたものである。尤も之は禪に限らず天臺眞言二宗も同樣に傳承不審として非難せられ、比叡山佛教の新提唱にかゝる圓密禪戒の四宗を一樣に非難したのであるが、傳教は之に對して內證佛法血脈譜を發表して其正統傳承なる事を立證し、その劈頭に禪宗血脈をあげてゐる。榮西が禪宗を以て日本佛教を中興せんとする顯文を作製したる根據は實にこの傳教の禪宗血脈にある。而して、內證佛法血脈中で圓密戒の三宗血脈は悉く支那相承であるに對し、禪宗血脈だけは日本相承を正系にあげ、支那相承は傍系に追加されてゐる事は禪宗が奈良佛教の中のものである事を特に注意したものである。血脈譜には道璿より行表を經て傳教が之を稟けた事になつてゐる。支那相承としては禪林寺の脩然から達磨の付法、牛頭山の法門を傳授した事になつてゐるが、傳教の事實に將來したる禪宗法寶の中には現に比叡山の國寶文書中の隨一たる六祖慧能傳がある事より推して、寧ろ馬祖門下の王姥の脩然より南禪を傳へたと見るべきであつて、特に牛頭山の法門と見るべき傳法の史料はない。この點よりしても傳教の禪は日本相承が正系であると見てよい。而して道璿行表とは大安寺教學中の人である。大安寺の禪門運動として古來全く忘れられたるものに戒明の傳大士信仰の存する事は特に注意して見たい。古來、戒明は延曆僧錄逸文には大佛頂

首楞嚴經の將來者として、守護國界章や教時問答には釋摩訶衍論の將來者として傳へられ、この二書共に僞書なりと斷ぜられ、特に大佛頂經は之を邪法なる故を以て燒却せんとせられたのを戒明は身を以て守護したと傳へられる。大佛頂は後の禪宗の最普遍的法儀たる首楞嚴會の所依であり、また當時にては弘法之を開題し、眞言法として傳教之を宮中に修し、守眞居士藤原魚名は寶龜十年東夷に盜起るや、奏して東大寺に於て佛頂行道を行ひて、攘災降伏の法となしてゐる。釋摩訶衍論よし又僞書なりと斷ぜられたりとするも、その東密教義組織における最も重要なる地位は何人も之を認むる所であらう。この日本佛教史上の極めて重要なる二大典籍、特にそれは僞書として問題の書となれるものを敢て將來したる戒明が一方また傳大士信仰を將來した事は、傳教が大安寺出身として、內證血脈中の大臺血脈に傳大士を列祖として列ねた創見とどうして無關係のものと見逃す事が出來よう。更に戒明の師たる慶俊また大安寺の人として夙に和氣淸麿をして愛宕山寺を建てしめ、比叡山寺の山林佛教の先驅をなせしを想ふ時、その弟子戒明の傳大士信仰の禪機の意義が一層鮮明する。玆で比叡山の禪宗血脈の相承の內容を見るに正法眼藏涅槃妙心を以心傳心するといふ事は未だ全く記さず「密語を法契として默受す」といひ、又達磨の惠可に授けたる法門としては「此法はこれ諸佛甚深波羅密の法亦これ諸佛總持の法、亦これ一切法の印、亦これ如來禪、亦一行三昧となす」と說かれてある。又傳法の信としては達磨より黃梅まで袈裟を傳へてゐる。普寂より道璿を經て行表に到るまでは理戒嚴合し受戒傳法が說かれ、行表より傳教は「心を一乘に歸すべき事」を稟けたと記してある。この心を一乘に歸する事を行表からうけた事を光定の一心戒文に於ては之を比叡山佛教獨自の菩薩戒法門となし、禪宗血脈の高祖達磨大師を以て比叡山の新提唱たる一向大乘戒を奉

ずる菩薩僧の歴史的第一人と仰ぐのである。この菩薩僧の歴史は禪祖達磨なくしては成立しないのみならず、さらにこの達磨大師を通して上宮太子をも菩薩戒法門中の人とし又天臺宗法門中の人とするのである。一心戒をそのまゝ禪戒であるとするのは面山の決である。さらに眞言血脈における一行禪師は禪法としての一行三昧を研精したるによりて其名を得、善無畏の傳法また總持禪觀の名を以てせられてゐる。こゝに比叡山新佛教の四宗は四宗ながら、禪によつて成立し、禪なければ成立せぬものになつてゐる。遮莫、傳教の禪を四宗血脈の文字の中に見出さんとするのは愚である。さらば傳教の禪を無文字中に如何にして見出されべきか。

## 二

げにや十二年籠山修行の山林佛教の提唱によりて比叡山僧團が生れたるその事が教外別傳である。籠山は學問により て教をうくる爲でなく、只だ行に入る事を勸むるのである。その傳法に於て三種法華を說き一切佛法は法華の根本、顯說、隱密三種中に攝せらるゝと說くもの正に之れ榮西道元二師の所謂「佛法總府」にあたる。又「一心三觀、傳於一言」といふ授法の新形式は拈華微笑そのものに外ならぬ。また先人未發の一向大乘寺の新制を五臺山佛教に倣ひて立つるといふもの鎌倉の禪院が寺院として完成樣式を誇ると同一軌である。榮西が日本佛法を中興するといふ意氣、道元が正法眼藏の傳持を以て任ずる、その獨創と叡山新天臺の獨創と全く一則である。果せるかな、傳教の後事を稟くるものに先づ別當大師光定ありて一心戒文を作り、比叡山新僧團の戒を以て達磨の戒と斷じ、天臺の師父惠思禪師の達磨受法說を

立て、次で慈覺に到つては、一、入唐して蕭慶中に禪をうけ、二、夢中に達磨、六祖惠能、寶誌の示現を蒙りて入唐求法の冥護を仰ぎ、三、赤山禪院建立を發願し、四、寶林傳十卷六祖檀經等の重要なる禪法典籍を將來し、五、さらに彼の開創にかゝる横川を首楞嚴院の名を以て呼びたる等、その禪宗弘通の足跡の甚大なるものあり、就中、赤山禪院の建立は智證が之を成就したのであるが、之實に日本最初の禪院の創立であつて、しかもそれが南亞相の山莊を以て院とし、玆に眞俗一乘の山莊佛教の端を開き、檀林寺、淳和院、雲林院等の山莊寺院はすべてこの赤山禪院に倣ひたるものである。特に淳和院は慈覺の菩薩戒の弟子である淳和皇后の發願にかゝるもので、この院に於て日本國中の尼僧すなはち婦人佛教を統一せんと計畫せられた事は、この皇后の母すなはち檀林寺の發願主檀林皇后橘嘉智子の禪法興隆運動と相連絡するものであつたと想像される。慈覺の一代の名著であり又日本菩薩戒法門の最高權威たる顯揚大戒論は實にこの淳和皇后の爲に書かれたものであり、この大戒論は即ち達磨の一心戒の布演に外ならぬものである。更に寶林傳の將來が日本禪學發達史上においてその影響を後世に及ぼす事の甚大なるは識者の夙に認むる處であり、かの安然の九宗判の如きこの書がその重要なる資料の提供者であつた事と思ふ。次で智證に至つてはその教相同異において禪師律師法師の三類の佛弟子を分ち、特に「禪は八宗の攝に非ず」と斷じたることは、興禪護國論第三世人決疑問の最重要なる典據となり、靜照の興禪記には「我國の山王院大師の云く諸法の至極は禪を以て源とすと、」いふ文を引證してゐる。三井の法流が鎌倉期において直接に禪法興起の誘因となつた事は、榮西の師父が三井の僧であり、圓爾が三井續燈記中の一人であり、公胤が道元の師であつた等に見らるゝ。更に智證の入唐將來の中に禪宗典籍の多きこと慈覺に讓らず、特に釋尊よ

り迦葉阿難乃至六祖惠能に至る禪門列祖の影像を我國に傳へた事は我國禪法興隆史上の特筆すべき事である。更に入唐中、國清寺に止觀堂を砂金三十兩を捨して建立したる如き却つて我國より彼國の禪を勸進した慨がある。智證の禪機はかの授決集の著述態度に最もよく表はれ、特に頓漸圓の三教論を立てたる事は、之を指導したる良譜闍梨の禪風と共に畏敬の念に打たるる。法華八教攝不論の歸結は必ずや此處に至るべきである。部教の一文化である。次で安然に至つて日本天臺即ち日本佛教における禪の位地を九宗判に定め、第一眞言宗第二佛心宗第三天臺宗としたるは、一處に眞言を圓教の有門、禪を圓教の空門と判じたるに照して、一大圓教中のものとして禪を認めたのである。又普通廣釋に傳大士を彌勒の生身として授菩薩戒の教授阿闍梨と仰ぐことは之れ禪戒の一致を說くものであり、又一切諸法皆是法体ととい て眞如戒体說を立てた事は後の面山か「禪戒には戒體の論なし」と永平祖の言を引いて斷じたると通ずる。安然の一大圓教論は傳教慈覺智證の全佛教運動の原理を大成したるものであつて、又實に鎌倉佛法總府正法眼藏論の源泉である。日本天臺の本覺無作三身說を以て凡夫成佛を高潮する觀心口傳法門の基礎は一に安然の四一論によつて立ち、之より顯密の教學は各學者獨自の境に自由雄飛を試み所謂諸流の分裂時代に入りて、禪宗の諸家分門と其狀態を全く一にしてゐる。安然の當時、天臺眞言二宗に南都六宗を加へて八宗を以て宗を論ずるも、空海の十住心論しかり、道詮の群家諍論しかり、蓮剛の定宗論しかり、而して此上に佛心宗を加へて九宗說を立てたる安然の用意に如何に禪を理解してゐたかがわかる。興禪護國論第四古德誠證門に第一に上宮皇太子をあげて之に達磨南岳天臺等の諸祖を攝し、第二に道璿、行表、第三に傳教、第四に慈覺、第五に智證、第六に安然をあげ、第七の最後に大宗現行の禪苑淸規をあげたる事は、日

本禪に安然已後その人なしと見たものであつて、之が日本佛法中興願文を作らねばならぬ理由でもあつたのである。

## 三

安然の後に鎌倉に入るまで遂に日本佛法中に禪の人は全くなかつたのであらうか。惠心院源信、多武峰の增賀、書寫の性空、箕面の千觀、兜率の覺超、池上の皇慶、等々の人々がすべてこれ正法眼藏涅槃妙心を求めなかつた人であるとどうしていへよう。如行にして佛心に會するか。此問題已外に佛徒の修行はあり得ない。中古天臺に教行證三重の口決を生じ、迹本觀四重興廢說起り、さらに四重深秘釋を生じたるもの只如何にして涅槃妙心に會すべきかの問題を取扱つたまでである。靜照の興禪記には空海に「禪宗秘法記」の著を認め、その中より「自證は曹溪の流を酌み、化他は惠果の旨にあり」といふ語を引用してゐるが、この意味は眞言事相佛敎もその內證は禪でなければならぬといふのである。恐らく此書は僞書であらうが、それにしても眞言の人と雖も禪を最後の問題にしてゐたといふ史料には充分なり得る。榮西に眞禪融心義の一著ありといはれる。之また當年の建仁寺や東福寺の敎風に照して必しも僞書と排すべきでなく、却つて眞言において求むるものは遂に禪に來つて得られべきを示す「密より禪」への過程を說くものと重要視すべきである。これは寶池房證眞の二宗同異に於て、眞言法を有相行と下して止觀の觀心無相行を高潮し、眞言を末世行なりとしさらに進んで「又來世の中には根機同じからず、唐朝の如きは今時多く達磨宗を好む。日域に於ても今人また行の不同あるべし」といへるは、末世相應の法門としては眞言より禪に移りつゝある事を述べたものである。之は同じく

寶池房門下の圓琳が俊芿の弟子となり、更に建仁寺長老となつてゐる事と照應する。圓琳は菩薩戒疏注釋の著者であつてこの書は顯密二宗の外に戒家を獨立せしむる源泉となつてゐる。この寶池房の門流より當代日本佛教を代表する顯密二宗の外に一新宗として戒家獨立の運動の起つた事は、やがて顯密二宗が行つまりて何物かに轉ぜんとする時に際會してゐた事を想見せしむる。彼が惠檀兩流を合一したといふのは實は兩流を超越したのであつた。もはや兩流及その末流の教相學の遊戯に滿足する事が出來なかつたのである。先是、飯室靜算が心地教行決を著して一心に文殊の正宗を求めて專ら觀心修行の實修の要を主張したる、忠尋が漢光類聚を著して天臺開悟の源泉たる南岳の心要を求め、宗教分と宗旨分を分ちて、宗旨によりて佛心に通ずべしといへる、修行至上主義の禪への接近が見らるゝ。後者を忠尋の作とするには疑問を存するも、その必要尊重の風は中古天臺を一貫するものであり、相ついで顯眞の山家要略記の如き、はた慈圓の拾玉集における和歌佛法の提唱の如き大膽なる觀心法門の續出したのであるから敢て引證する。山家要略記は比叡山をそのまゝ寂光淨土とする神學書であり、和歌佛法は和歌すなはち眞言陀羅尼なりと說くのである。すべては心要を求め宗旨を熱望したる結晶である。かくして中古天臺の口傳法門はあらゆる方面に發達をとげた、歸結は關東天台笠印の法門に所謂、一、止觀は法華の大意に非ず、二、變易の名言は實報に亘らず、三、十行出假の菩薩は圓の無作を習はず、の三科の義になつたのである。第一は法華の教に捕はれないこと、即ち八教の攝に非ずと法華を超越せしめたることから更に百尺竿頭一歩を進めて、超八醍醐の法華をも超越せよといふは正にこれ教外別傳をとくものである。第二は正法眼藏把持の內證の絕對性を說き、第三また實參の境致は教によつて窺ふ事を許さぬと說くものである。恐らく此三

科の笠印法門なるものは東福寺圓爾に參したる靜明の法をうけたるものであらうが、已に四重興廢の說かるゝ已上、法華迹門起れば爾前四時の法を亡じ、法華本門起れば迹門を廢し、觀心興れば爾前四時、法華本迹の法一切を亡ずるのであり、又四重深祕釋は人境俱に奪ふものであれば、關東天臺笠印法門の禪機は敢て奇とするに足らぬ。觀心法門の發達の當然の經路である。

## 四

上來、日本禪興隆の直接の端を開きたるものは三井寺なりと摸索したのであるが、道元をして建仁寺に赴かしめ榮西につかしめたる公胤に決疑抄の一著ありて念佛門を破したといふ事と明惠上人が禪の人として摧邪輪を著して同じく念佛門を破したると相呼應して三井の教風を推せしむるものがあるが、かく三井に特に禪風の傳持せられたのは何に歸因するかを考ふるに、第一に智證の禪祖肖像將來、教相同異集の禪宗の判教論ある事は前にのべた如くであるが、三井の三摩戒壇獨立運動、修驗道奬勵、教待仙人を通じての彌勒信仰、授決集の秘密相傳等はすべて禪法興隆への階梯をなしてゐるのではないかと思ふ。三井戒壇獨立は興禪護國論における禪宗の獨立を勅許を仰いで決行せんとするものと頗る相似ており、修驗道の行門は北嶺にも相應和尙に回峰行が開かれてゐるけれども、三井の修驗道の盛には及ばぬ感がある。その修行至上主義は禪と相通ずる。彌勒信仰は三井に於ては俱舍學が盛であつたからその影響とも見らるゝが、安然が傳大士を菩薩戒教授阿闍梨の彌勒とした方の意味から見るべきである。かの三井の義學を大成したる龍淵房智寂房

二流の源泉をなす箕面の千觀が晩年に馬士になつたといふ傳說は傳大士傳そのまゝである。授決集玄義の授受また龍淵智寂二流の興起の後に盛となりしが如く、其玄義なるものは全く一般教家の未傳の法であつた。之は智證の傳にも良諝より前人未傳の義を口決したとあれば此秘傳は三井開山當初よりのものかとも思はれる禪風である。特に寶池房證眞が智寂房良明の弟子良慶の「文富義深なるを善しとし三井に來つて禮を作すこと三遍」と傳記せらるゝ事は、彼が末世佛教としては眞言より禪の方が盛行すると擧揚した事と符合する。思ふに三井教學の中心をなすものは授決集であらうがその內容は全く古來の宗義を超越したる頓漸圓の三教判を始め、八教攝不論等すべて三井一流傳法の秘訣たるを失はず全くこれ教相學の遊戯から離れた眞劍なる心地の教行を說くものである。之が研究を重ね行く時いつしか教外別傳の世界に進み入る事となつたのである。抑も法華は八教の攝に非ずといひ、止觀は法華の大意に非ずといふもの、すべてこれ無言說無文字の境において單行を以て之を把持すべきを說くのである。觀心法門が本迹未分の重において一切の法門を取扱ふといふのは無文字の境を高潮するに外ならぬ。

## 五

多武峰の覺晏を道元が「明眼の士なり」と贊し、榮西の前に大日寺能忍の禪が傳へらるゝ。之等は三井とは別系のものであるが、多武峰が夙に維摩の淨土を以て任じ、三大部外典鈔を出したる、その眞俗不二門の思想的見地は自ら禪と相通ずるものがあつたのであらう。能忍等の禪は先に奮然の三學宗將來あり、後に我禪房俊芿の禪あり、その中間にお

いて商船の往來を機として不充分ながら傳來したものであつたらふと思ふが之また一の前階段の運動たるを失はぬ。遣唐使廢止が平安中期に斷行せられてより、日本佛教は專ら內觀を進めて觀心法門の妙を盡したのであるが、それは或は修驗道の如き行となり、又は山林隱逸の遁世行となり、或は西方往生の口唱念佛行となり、支那佛教の刺戟をまたずして發達し得るだけの極度に到達した。しかし物は常に進む。極度といふものはあり得ない。それは行つまりである。何等が打開の道を講じなければならぬ。加之比叡山乘圓頓戒の籠山十二年制度にも甚しき頽廢狀態を來し、圓戒非戒の自由法門は惡く曲解されて全く無戒の有樣となり、こゝにも滿たされぬ空虛があつた。すべては求むる心で極度の緊張にあつた。この求むる心の滿の眞劍さがあるものには口傳法門のよき發達があり決して墮落する事はなかつたのであるがそれにしてもこの口傳法門の高遠な　教義を大衆化するには、もはや國內在來の文化機關だけでは何等の新味を齎すものがなくなつた。この時にあたり西元二師の入宋傳法は全く驚天動地の一大刺戟を起した事は想像に難くない。明惠上人が入宋を熱望したことも只この刺戟をうけたかつた爲である。この新しく耳目に入り來りしものと、之まで求めてゐた心の用意の一致が忽ち種々の教禪一致論となり、禪院の寺院風俗改革となり、玄旨歸命壇の公案作製の如き局面展開を起したのである。光宗の溪嵐拾葉集に德山の棒、臨濟の喝、その日本在來の佛教に全く見ざる禪の語錄の新佛教術語に非常なる新しき興味を感じたる事がよく描寫されてゐる。戒家が黑谷を中心として獨立するといふ運動も全くこの禪宗運動の影響にまつものが多いと見てよい。道元が此間に處して特に天童受法をのみ高潮して日本相承を說かざるものは、禪宗の名を否定し、佛法總府說を提唱する必然のものである。その內證は日蓮が本門戒を唱へ、慈圓が國神中心

の神本佛迹說をたつると同じである。觀心法門の徹底が入宋求法の行である。徒らに觀心を口にして此大勇猛行の決行に入り得ざりしものは眞に觀心の人でなかつたのである。當時としては入宋求法巳外に觀心の行は無かつたのである。西元二師は之を斷行したのである。而して京都の地より一歩も出づる事能はざりし桎梏中の佛教に自由を與へて或は鎌倉五山、と或は關東天臺、或は永平寺たらしむる大馬空を行く底の活動を起さしめたのである。之こそ觀心法門の正統の發展であつて、この入宋僧の眞劍なる觀心行がなかつたならば、日本佛教は或は魔道におちたかもしれなかつたと思ふ。而して觀心の名が正法眼藏涅槃妙心といふ大衆的名稱におきかへられる事も又これ觀心行の正統たるを失はなかつたものと思ふ。こゝで圓頓戒と禪戒すなはち佛法總府論に入るならば、經豪抄に「三聚淨戒　皆これ阿耨多羅三藐三菩提なり又云く一實相の功德を三度これを說くなり」と。何ぞ圓戒の觀心の妙を極めたるや。もし三聚淨戒とは攝律儀攝善法云々等といはゞ之佛頭塗糞のみ。鎌倉の禪は日本佛教の正統發達の一乘因果である。餘り平凡なる結論ながら。